

龍泉寺城(名古屋市守山区竜泉寺)(龍泉寺)

龍泉寺は何度か軍事施設として使われたこともあり、「龍泉寺城」とされることもある。現在でも境内の周囲の一部には空堀状の跡が残されているほか、境内裏側の日本庭園の横には三層の模擬天守が建てられている。これは、重要文化財の木造地藏菩薩像や円空仏などを所有する宝物館を兼ねている。(

Wikipediaによる

龍泉寺城は織田信長の弟である信行が兄の信長と争った際に築城した城です。最澄が創建したと伝わる「龍泉寺」という天台宗の寺院が利用されました。戦略上の立地に恵まれているため、「桶狭間の戦い」や「小牧・長久手の戦い」においても軍事施設として使われています。現在でも境内の周囲の一部には「太閤堀(一夜堀)」と呼ばれる、秀吉が築いた空堀が残っています。また、境内裏側の日本庭園の横には模擬天守が建てられています。

「攻城団」による

天正 11(1583)年 3 月 6 日、織田信雄が岡田重孝・津川義冬・浅井長時の三家老を秀吉に内通している筈で伊勢長島城で謀殺した事に端を発した「小牧・長久手の戦」、徳川家康、豊臣秀吉が直接対決した只一度の戦いでした。

天正 12(1584)3 月 21 日、3 万の軍勢を率いて秀吉は出陣し、27 日犬山城(愛知県犬山市)へ入る。一方家康は小牧山(愛知県小牧市)へ陣を敷き清洲、三河との連絡のため各地に砦を作り、小幡城を修復し本多広孝を配した。両軍の勢力は秀吉軍 15 万 7000 人、対する家康軍は 6 万 1000 人。しかし家康はこの数の劣勢を補うに十分の根来衆、雑賀衆を初め多くの忍びの者を擁していた。

秀吉軍池田信輝は家康が小牧山に陣している隙に家康の本拠地三河を攻め、家康を孤立する作戦を立て行動を開始。4 月 8 日夜半、池田信輝、森長可(ながよし)、堀秀政、豊臣(三好)秀次(秀吉の甥、後の関白秀次)らに率いられた西軍勢 2 万余は楽田(愛知県小牧市)を出発、庄内川龍泉寺下、上ノ瀬、中ノ瀬、下ノ瀬辺りを渡河。

家康はいち早く情報を入手すると本多広孝いる小幡城に夜間行軍にて移動。先行していた西軍は先を急ぐ余りか、兵士の消耗を憂いたのか、東軍の動向に気づく事なく小幡城を攻撃する事もなく素通り。遅れて小幡城に到着した家康軍はすぐさま白山林辺りを進軍中の西軍しんがしの豊臣(三好)隊を追走奇襲、不意を付かれた豊臣(三好)軍は長久手方面へ敗走、「白山林の戦」(白山林の戦い頁参照)は 1 時間余りで終結した。(軍勢については諸説有る。)

白山林の敗戦の報を聞いた池田信輝、森長可は直ちに仏が根(愛知県長久手市)に陣を敷き、白山林から転戦してきた東軍大須賀康高隊らを迎え撃ち一時は優勢に戦いを進めるが、やがて小幡城を 9 日 2 時頃出發し、東へ迂回し岩作・富士ヶ根へて前進してきた東軍家康隊が参戦し東軍井伊直正軍の鉄砲攻撃を受け池田信輝、森長可は討ち死、西軍豊臣(三好)秀次隊は戦況不利を悟ると退却を始め戦いはお昼頃には全てが決着した。

夕刻 4 時頃家康隊は小幡城に帰参。このころ秀吉本体は犬山城を出て楽田城へ移動、一戦を交えるため長久手を目指していたが日没のため龍泉寺城に入った。

小牧城より北西に 10km 余、小幡台地の縁に沿って造られた小幡城と龍泉寺城、その距離わずか 2km 程、秀吉隊は家康が小幡城に居る事を確認するが、古来より夜の城攻めは避けるべきとの慣に従い明朝攻撃する事を選択。この時秀吉軍が戦帰りで疲れている家康軍を即攻撃していたら歴史はどう変わっていたか解らない。一方小幡城に入った家康隊は情報戦で秀吉本体が龍泉寺城に入った事を確認すると素早く、そし

て静粛にわずかな兵を残し夜陰に紛れまんまと庄内川を渡河、小牧城に帰還してしまった。両雄がただ一度戦った小牧長久手の戦いの中で最も二人が接近した時でした。

明朝この事に気づいた秀吉は「畏にも餅にもかける事ができない 敵ながら天晴れと」と言ったとか。そして秀吉本隊も龍泉寺に火を放ち楽田城を引き上げていった。

「守山区ちょっと歴史散歩」による

